

## 山形の竹細工

最上義光によって整備された城下町山形には、職人町の一つに桶町があり、桶・樽の生産に竹の「たが」が使用されていました。明治に入ると、養蚕が盛んになり、桑籠やワラダなどの養蚕道具が主に作られました。戦前から戦後にかけては、魚籠・野菜の背負籠や土産物の果物籠などが、市内に20軒近くあった竹細工屋で大量に生産されました。現在は、プラスチック製品におされて竹製品の需要は減少し、主に花籠や民芸品などがつくられています。

### 本越市太郎氏の竹細工

本越市太郎氏（1912～）は、山形市本町で現在活躍中の竹細工職人です。竹細工の道一筋に励み、山形竹細工組合長として、山形竹細工の発展に大きく貢献しました。すぐれた技術は高く評価され、昭和52年に県知事賞を受賞し、平成元年には伝統的工芸品産業功労者として表彰を受けています。製作品は日常生活用具が中心ですが、時代の変化にともない、現在は花籠などの装飾品が主となっています。

### 竹細工製作工程



宗全籠を編む本越市太郎氏

黒竹を用いた花籠（宗全籠）の製作工程について解説します。まず、ノコギリで竹を約1mに切り、次にナタで竹を小割ります。できあがった竹ヒゴの表面だけを使うため、ナタで約1mmの厚さに剥ぎます。これが最も熟練を要する作業です。次に、竹ヒゴの幅を一定にする幅揃え、角を取る面取りの作業を行ない、もう一度竹ヒゴの両端を2枚に剥いで、やわらかくします。ここからが竹編みの工程です。竹ヒゴを縦横8本づつ四つ目に組んで底を編み、回し竹を入れて徐々に立ち上げていき、続いて横編みにうつります。次が、竹ヒゴの先の部分を曲げて反対側に差し込み、籠の口にあたる部分をつくる編み上げの作業で、最も慎重に行なわれます。最後に手の部分をつけ、あけびのつるを巻いて美しい宗全籠が完成します。

## \*主な展示資料\*

### 竹とくらし

盛旅・ささら・柄杓・盆・弁当・盛籠・自在鉤・行李・手籠・番傘・弓張提灯・編み笠・かんじき・背負籠・魚籠・海苔摘み籠・鮭笊・どじょう笊・苗籠・竹じょうご・竹そり・桑籠など 約70点

### 竹と信仰

門松写真・七夕写真・縁起物竹製熊手・長瀨猪子踊[ササラ]・熊まつり[湯立て神事]・青竹提灯まつりなど 約20点

### 竹と遊び

竹馬・竹製機関銃・弓矢・やじろべえ・風車・竹人形・隠明寺風・竹下駄・水鉄砲・紙鉄砲・杉鉄砲・竹笛・竹とんぼ・竹製蛇など 約40点

### 竹の工芸

畠中九郎氏作品・本越市太郎氏作品・竹塗り重箱・ペリアンとタウトの作品・竹細工製作工程資料・竹製品の構成と編み方写真など 約50点

## 竹細工実演のご案内

- (1) 日時 11月3日(日) 午後1時30分～午後3時
- (2) 場所 山形県立博物館 1階展示ホール
- (3) 講師 本越市太郎氏（山形竹細工組合長）
- (4) 内容 「花籠を編むー竹細工職人の技(わざ)ー」

## \*展示協力者・機関\*

板垣 英夫（山形市） 菊地 和博（東根市）  
鳥山 啓介（山形市） 舟山 仲次（小国町）  
本越 市太郎（山形市） 山崎 正（高島町）  
熊谷竹材店（山形市） 熊まつり保存会（小国町）  
高 島 町 高島町教育委員会  
長瀨猪子踊保存会（東根市） 双美保育園（山形市）

（順不同、敬称は略させていただきました）

## 企画展

# 竹の用と美

ーくらし・信仰・遊びー

平成8年9月14日(土)～11月17日(日)

## 山形県立博物館

〒990 山形市霞城町1-8 TEL 0236-45-1111



## 開催にあたって

やまがたにくらしている私たちは、台所用品などの生活用具、農具・漁具などの生産用具、お祭りや年中行事における信仰具、さらに楽器や子どもの玩具など、身近な生活用具の素材として、昔から「竹」を利用してきました。また、やまがたにはすぐれた技術で竹製品を作りあげる竹細工職人が数多く活躍しています。

この企画展は、私たちのくらし・信仰・遊びの中に利用されてきた竹製品の実物資料を展示するとともに、素材を巧みに生かす竹細工職人のすぐれた技術を紹介し、私たちの生活の中で果たしてきた竹の役割を見直そうとするものです。

本展の開催にあたって、貴重な資料を出品して下さった方々や、ご協力をいただいた方々に厚くお礼申し上げます。

館長 星野武雄

# 展 示 解 説

## 1. 竹 と く ら し

竹は私たちの身近に群生している植物であり、成長が早く、中空で節がある・軽量である・弾力性がある・耐久力があるなどの種々のすぐれた特性を持っています。これらの特性を利用して、台所用品や家具などの生活用具、農具や漁具などの生産用具、さらに交通・運搬具や和傘・提灯などに幅広く活用されてきました。現在も、竹の持つ特性を生かして使われ続けている用具はたくさんありますが、一方、社会生活の変化の中で、数多くの竹製品はプラスチック製品などにおおされて姿を消してしまいました。



竹 の 漁 具

## 2. 竹 と 信 仰

古来より私たちは、竹が他の植物にみられない生長力や繁殖力を持つこと、幹が中空であること、常緑で冬でも青々としていることなどに神秘性を感じとってきました。このような神秘さや清浄さから、竹には特別な霊力があるものと信じられ、神を招き迎える依代となる神聖な植物と考えられてきました。そのため、竹や笹を用いた信仰行事が全国的に行われています。山形県内においても、正月の門松や七夕などの年中行事に使用されるほか、「青竹提灯まつり」（高島町）・「熊まつりの湯立て神事」（小国町）・「長瀞猪子踊」（東根市）など、竹や笹を用いた祭礼が各地にみられます。

## 青竹提灯まつり

高島町の夏をいろどる「青竹提灯まつり」は、毎年8月15・16日に盛大に行なわれます。その起源は、安久津八幡神社の白木の御輿が、毎年8月15日に高島のおかりや（厳島神社）に遷座し、そのとき、村人が青竹提灯を下げて迎えたものと伝えられ、約300年の歴史を数えることになります。この伝統が受け継がれた「青竹提灯まつり」は、昭和42年から夏祭りとして行なわれ、パレードもいろいろと趣向をこらし、年々賑いを増してきています。青竹にたくさんの提灯を結びつけて神霊を迎え、その下を町中の人々が踊り歩くというこの祭りには、神聖な竹が欠かせないものです。

## 熊まつり「湯立て神事」

小国町長者原・小玉川両集落には、古くからの狩猟の習俗が残っています。「熊まつり」もその一つで、獲った熊の鎮魂を祈願し、山の神への感謝を捧げる祭りとしてされています。現在は、毎年5月5日に熊狩りの模擬実演も含めて行なわれています。祭りでは、山の神に感謝の祈りを捧げ、続いて、村の法印が祈禱を繰り返す、釜の煮え湯に笹竹の束をつっこみ、葉についた熱湯を振りかける「湯立て神事」が行なわれます。これは狩人の心身を浄めるもので、笹でかけられた湯は熱くないとされていました。このような神秘的な行事に、清浄な笹が用いられています。

## 3. 竹 と 遊 び



竹 の 玩 具

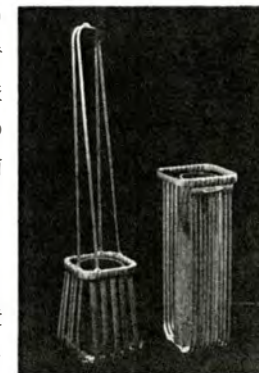
竹馬・水鉄砲・竹とんぼ・竹下駄・竹笛・弓矢など、身近な素材である竹を利用した子どもの玩具が数多くあります。いずれも自然の中から作り出された、あたたかみのある玩具であり、かつては子どもたちが自分で工夫して作り上げたものでした。このような竹製玩具の遊びを通して、私たちはたくさんのお話を学びとってきました。

## 4. 竹 の 工 芸

竹細工職人は、すぐれた技術で数多くの竹製品を作りあげてきました。山形県内の竹細工職人の中でも名工といわれている畠中九郎氏・本越市太郎氏の製作品から、素材を巧みに生かす確かな技術を知ることができます。このような日本のすぐれた竹細工の伝統技術はヨーロッパ人にも注目されました。しかし、社会生活の変化により竹製品が急速に失われていくにつれて、竹細工職人の姿もしだいに消えつつあります。

## 畠中九郎氏の竹細工

畠中九郎（鳳山）氏（1904～1991）は、遊佐町吹浦生まれの竹細工師です。名工飯塚鳳斎に弟子入りして厳しい修業を受け、師鳳斎より鳳山の雅号をもらいました。その後、吹浦に戻り、竹細工の創作活動を続けました。昭和47年には、現代の名工として労働大臣表彰を受けています。畠中氏は伝統的なものを嫌い、創造することを大切にしました。製作された作品はほとんど華道や茶道用で、竹の編み組みの美しさを感じさせるものばかりです。独創的な作風が光る、山形の生んだ名工といえます。



花 籠

## ペリアンと竹芸



竹 製 盆

シャルロット・ペリアン（1903～）は、パリ在住の世界的なインテリアデザイナーです。昭和15年に輸出工芸指導のために来日し、国内各地でデザイン指導を行ないました。「民芸運動」の提唱者である柳宗悦氏の招きで新庄を訪れた際に、彼女のデザインに基づいて竹製盆（テーブルと椅子のセット）などが製作されました。2年余りの滞在中、日本の伝統的な民芸品の技術を生かした創造的な作品を、竹・藁・木・陶器などの自然材料を用いて、数多く作り出しました。